

研修報告

研修名 医療的ケア児の災害対策～九州各県の取組み～ 研修日 令和7年8月4日(オンライン)

内容

① 福岡県 総括医療的ケア児等コーディネーター(以下Co)中原京子氏

事例の紹介。人工呼吸器装着児。《ここにおったとね》の声がつなぐ命。訓練後、地域の子育てサロン、運動会、花火大会に参加。地域の参加者も涙ぐんで児を迎えてくれた。一般家庭10日分の電気量確保可能な電気自動車。日産と協定締結し災害対策強化へ。一人の母の不安が行政を動かし、一緒に確認することで何ができるかを話し合うきっかけに。目的：自助を強めるための実践型訓練。避難指示が出たら空振りでも避難。「日頃から避難への意識づけ」メリット：いざという時にためらわずに動ける。実際行ってみないとわからない課題が見える。地域の支援者との連携が深まる。繰り返すことで協力体制が整う。

《備え》は特別なことではなく、《暮らし》の一部。

②長崎県 医療的等ケア児等Co 井村弘子氏

訓練実施した市町は21市町中2市町。参加者：医師、医ケア児等Co、行政等。対象児：9歳気切。胃瘻。全介助。

避難先施設：「あゆみの家」（地域連携室、事務所等。非常用電源完備）訓練1ヶ月後に反省会。

気づき：避難のタイミングはいつ？準備品は保護者や兄弟児の荷物3日分は必要？非常用バッテリーが不足。家族の声「実際やってみてこそ分かったことがたくさんあった」

③佐賀県 防災アドバイザー 朝永涉氏

20市町中6市町が実施。医ケア児263人。災害時個別避難計画作成状況：56人。人工呼吸器装着者81.82%。

吸引等の電源必要者35.9%。避難行動要支援者個別非難計画書、災害時の対応フローチャート、持ち出し品チェックリスト作成。参加者：市役所こども家庭課、福祉課、防災減災課、民生児童委員、保健師、訪問看護、防災アドバイザー、消防署。避難場所：市役所の3階フロア。実際：避難者車両前後部にステッカーの貼付。風水害にも対応できるようにするためコンテナに荷物準備。訓練後、その日に反省会を実施。

避難計画書が本当に実効性のある計画なのか、受け入れ職員の動きなどの気づきを話し合う。毎年職員や地域環境が変わるために、1回の訓練で終わらず毎年繰り返すことで地域・行政・支援者との顔の見える関係を築く。

④熊本県 総括Co 社会福祉士 宅島恵子氏

ケース1(県南の市町村) 人工呼吸器装着児(者)地震想定。参加者：57名。対面会議5～6回。準備期間：2か月。不安：医ケア児の訓練の優先順位が低い。自宅待機が有効か。責任の所在。長期滞在が困難。連絡網の作成(個人情報保護の観点)。実際：自宅の医療機器がどの部屋にあるか一目で明確化。自宅からの避難をzoomにて放映。感想：家族「近所に助けを求めるのが一番大事と分かった。」参加者「荷物がこんなに多いとは。」「歩ける範囲に異なる避難先設定し、毎年訓練が必要」

⇒大規模訓練は継続して開催するのは困難。→もっと小規模で出来る避難訓練はないか？

ケース2(玉東町)白木地区～役場まで4カ所の避難所をお散歩。地域の方と初めての挨拶。ご近所さん一緒に。避難経路の途中で段差の確認。総勢38名と意見交換会開催。

感想：家族「このつながりを通してお互い様で助け合って生きていけたら」参加者「地域にこんな支援が必要な方がいることを初めて知った」「避難訓練を通じて地域づくりが進んでいくことを願う」

1.医療的ケア児のご家族には「力を貸してほしい」とご家族から声をあげてもらうように促す。

2.支援者はご家族が声をあげやすいように、平時から地域の皆さんと顔の見える関係を構築しておく。

3.事前に地域の皆さんと継続した避難訓練をしておくこと。

④特別公演「災害時要配慮者の防災対策を進めるファーストステップ」杉山高志

(2) グラデュアル・オンセット・ディザスター(gradual-onset-disaster)

(2)フット・イン・ザ・ドア・ストラテジー(foot-in-the-door-strategy) (3)ブリコラージュ(bricolage)